

長編小説

大航海 上

伴野朗



大航海

上

伴野朗

集英社

長編小説
だいこうかい
大航海 上

一九八四年 四月二十五日 第一刷発行
一九八六年 五月二〇日 第四刷発行

定価 九八〇円

著者 伴野 朗
とももの ろう

発行者 堀内末男

発行所 株式会社 集英社

東京都千代田区一ツ橋二五―一〇
郵便番号 一〇〇―

出版部 (〇三三) 二三八―二八四三
販売部 (〇三三) 二三三―六一七一

製作課 (〇三三) 二三八―二九六四
印刷所 凸版印刷株式会社

検印廃止

乱丁・落丁本が万一ございましたら、小社製作課宛にお送りください。送料は小社負担でお取替えます。

目次(上巻)

秘	誕	靖	前	童	初	宮	倭	龍	プ
宝	生	難	夜	謡	陣	刑	寇	潭	ロ
									ー
									グ
202	182	161	134	109	89	64	37	11	7

装丁 装画
三村 加藤直之
淳

主な登場人物（上巻）

馬三宝

のちの鄭和。宦官として燕王に仕える。

馬哈只

三宝の父。

洪武帝

朱元璋。明王朝の創始者。

建文帝

朱允炆。洪武帝の皇太孫。明二代目皇帝。

燕王

朱棣。洪武帝の四男。のちの永楽帝。

鄭妃

燕王の愛妾。

道衍

燕王に仕える僧。

思真

道衍の弟子。

楠木多聞

倭寇の一派、南寇の頭領。

村上義宏

多聞の右腕。村上水軍の後裔。

尉遲子良

洛王に仕える勇士、のち燕王に隨身。

李挺

弓の名手。三宝の旧友、のち燕王に仕える。

犬

怪盗。子良の子分になる。

徐元

妖術を使う道士。暗殺のプロ。

ティムール

ティムール王朝の創始者。

長編小説

大航海

上卷

プロローグ

北京秋天――。

北京の秋は、世界一である。

春には、空一面を黄塵が覆うあのうっとうしきはずでない。夏の煎りつけるような酷暑も嘘のように消えている。

爽やかな涼風と抜けるように高い蒼穹に誘われて、私は宿舎の北京飯店を出た。東に北京一の繁華街王府井通りが南北に走っている。ホテルの前の大通りは、東長安街である。天安門前で広場のなかへ溶け込み、西長安街の出発点として西へ向って伸びている。

一カ月余にわたる黄河取材を終え、濟南から北京に戻ったばかりだった。あと数日、北京の秋を楽しんで帰国するだけの旅の大詰めだった。

私の足は、天安門に向っていた。

文字通り十億の首都の中心部にどっしりと腰を据える

この門は、見る人に軍艦のような印象を与える。

明の永楽帝は一四二一年、南京から北京に遷都した。北京城の造営はその直前に完成していたが、当時この門は「承天門」と呼ばれていた。天安門の名ができたのは、一六五一年、清朝が承天門を再建し、皇城の正門とした時である。裏門の地安門と対称をなし、紫禁城の中央を通る南北の一直線上に並んでいる。

「五闕、九楹、彤扉三十六」と形容されている。すなわち、五つの出入口にはアーチ型の通路があり、楼上には十本の柱と、彩色を施した三十六の扉があるのだ。楹は、柱と柱との空間のことで、九つの空間、つまり十本の柱を意味する。

巨大な朱色の壁には、向って左に「中華人民共和国方歳」、右に「世界人民大団結万歳」の大きなスローガンが掲げられ、二層の屋根を持つ楼上には、天安門に五星を配した国章が輝やいている。

私は、天安門の楼上に眼をやってから左へ折れた。四十万人の集會を可能にするといわれる天安門広場である。この日も、全国から集まった観光客が広場を埋めていた。広場は、四方を壮大な建物によって囲まれている。北が天安門、南が毛主席記念堂である。西には、人民大会堂が聳えている。東側には二つの建物がある。革命博物

館と歴史博物館である。

革命博物館には何度も足を運んだことがあるのに、歴史博物館にはどうも縁がなかった。暇を見て訪れると、休館だったり、整理中だったりで、まだ入ったことがないのだ。北京へは何度も来ているのに、それはまったく奇妙な巡り合せであった。

——きょうも休みだろう。

そんな気で、歴史博物館の前に立った。

開館していた。

断っておくが、その日、歴史博物館を訪れる意思は最初はなかったのだ。散歩に出て、たまたま通りかかったところ、開館していた、というにすぎない。

とにかく、入ることにした。

だから、彼との出会いには、なにか運命的なものを感じるのである。

彼との出会いのきっかけとなったそれを見たのは、二階奥の明代展示室の一郭だった。

それは、長大なガラス・ケースに収まった木片だった。優に十メートルはある。

——なんだろう？

私は、思わず足を留めた。最初は単なる好奇心であった。

説明文には、

——明の鄭和「西洋取宝船」の舵軸部。
と、あった。

舵軸部というからには、横に寝かせてあるが、本来は舵の縦軸となる部分であろう。

——それにしても、でかいな。

それが、偽りのない第一印象であった。

説明文は、さらに続いていた。

——一九五七年五月、南京西北西郊の明代の造船所「宝船廠」跡から発見されたこの舵軸部によって、『明史』鄭和伝に記述された宝船の大きさが科学的に実証された。

思い出した。

鄭和は、明初の大提督である。永楽帝の命を受け、二十九年間に七度にわたって南洋からインド洋、はるかアラビア半島まで、さらにその分遣隊にいたってはアフリカ東海岸まで押し渡った大航海時代の先駆者である。だが、その業績を記す文献は驚くほどに少ない。彼らが乗った船にしても、規模については『明史』鄭和伝の記述しかないのだ。

——永樂三年六月、鄭和と彼の同僚の王景弘らに命じて西洋に通使せしめた。士卒二万七千八百余名を率い、多くの金幣を持参させた。大船を造り、長さ四十四丈、幅十八丈のもの六十二隻を建造した。

だが、この船の寸法をメートル法に換算すると、長さ百五十メートル、幅六十二メートルもの大船になる。そのような寸法の大木造船を想定すると、実に八千トン級の船になるというのだ。それが、六十二隻でもある。

——この時代に、八千トン級もの木造船が建造できたのか？

と、いう疑問は、当然のことながら出た。そして、さらに、

——『明史』の記述には、白髪三千丈式の誇張があるのではないか。

といわれてきた。鄭和の第一次航海の八十七年後に、コロンブスがアメリカ大陸を発見したが、その船団はわずか三隻の八十八人、彼の乗った旗艦『サンタ・マリア号』が二百五十トンに過ぎなかったことを考えても、これらの疑問は、当然すぎるほど当然のものであった。また、コロンブスの五年後にアフリカ南端の喜望峰を回ったヴァスコ・ダ・ガマの船団にしても三隻に過ぎず、旗

艦『サン・ガブリエル号』は百二十トンであった。

ところが、前述の通り宝船廠跡から十一・〇七メートルもある舵軸が発見され、鄭和の船団のものであることが明らかになったのである。

この舵軸をもとに舵を復元し、この舵の大きさに見合う船の大きさを、専門家たちが算出した。その結果、船の長さは、短くても四十八丈、長ければ五十三・六丈にも達することが科学的にも立証されたのである。

長さ四十四丈とする『明史』の記述は、誇張でもなんでもなかったのだ。いや、むしろ控え目な数字であったといえる。当時の明の造船技術は、不当に過小評価されていたわけである。優に八千トンの木造船を造り得る水準を有していたのに……。

だが、それにしても、コロンブスやガマの船団に比べ、鄭和の船団がいかに堂々とした大がかりなものであったことか——。当時、二万七千余もの人員をかくも広域まで海上輸送した例を知らない。

スペイン、ポルトガルによる、いわゆる大航海時代に先立つこと約九十年。鄭和の築いた「遺産」は、なぜかその後の中国に引き継がれることはなかった。一步も二歩も、世界に先んじていた筈の明は、西欧の大航海時代に完全に遅れをとったのである。以後、中国にその栄光

は魅^まつていない。

ただ、鄭和の名のみが、世界の航海史上に燦然と輝や
いているだけである。

その鄭和について、驚くほど資料が少ない。特にその
前半生と晩年は、ほとんど知られていないのだ。少年期
の生い立ちはもちろん、正確な没年も、墓の場所もわか
っていない。

——なぜか？

彼が、宦官^{かえん}であったことも、その一つの理由であるか
も知れない。その出身が、元代のいわゆる「色目人」
——アラビヤ系人であったことも……。

それにしても、史料は、この大航海者について、きわ
めて寡黙である。それは、不当といえるほどに。

私は、飽くことなく、眼前の舵軸を眺めていた。ふと
気がつくと、腹の底からなにか熱いものがこみ上げてい
た。それは、万里の大海原を征服した鄭和への焼けるよ
うに鮮烈な思いだった。

——世界に先がけた大航海者、鄭和とは、いかなる人
物であったのか。

展示室には、「鄭和の船出」と題する一枚の油絵が掲
げられていた。もちろん、当時の想像図である。私は、
いつしかその絵を魅^ませられたように見詰めていた。

巨大な帆を張りめぐらせた巨船が、次々と波濤を乗り
越えている図柄^{えがな}だった。いかにも逞ましい大船団である。
さらに息を詰めたまま、この絵を見入っていた。あた
かも、私もその乗組員になったかのように……。

突然、奇妙なことが起った。それが、いわゆる白昼夢
であるか、どうか、私には判断できなかった。

それはともかく、波の音がしたのである。巨大な船体
を打つ波の音であった。

耳を疑った。だが、異変はなおも続いた。

今度は、風の声を聞いたのだ。幾百、幾千の帆をいっ
ぱいにふくらます風の声であった。海鳴りも続いていた。
潮のむせるような香が鼻を突いた。瀬戸内で育った少
年時代に馴染んだ、あの懐かしい潮の香だった。

——白昼夢を見ているのだろうか……。

もう一度、自分の五感を疑ぐった。

だが、もっと不思議なことが起った。

絵の船団が、ゆっくりと動き出したのである……。

龍 潭

1

八月の焼けつくような日射しが、乾いた田舎道を照りつけていた。陽炎が、何重にも燃え、絡み合うように舞っている。

洪武十四年（西暦一三八一年）——。

元末の群雄割拠の戦乱は、紅巾軍を率いた朱元璋の手によって一応平定され、漢民族の国家「明朝」が出現していた。洪武帝となった朱元璋は、皇帝に絶対権力を集中する独裁専制君主制を確立、集慶（南京）を応天府と呼んで都と定め、国内整備を第一とする国づくりに着手していたが、ここ中国の西南部、雲南の地は、モンゴル族の国家「元王朝」から封じられた梁王の影響下にあり、新国家明の威令にまだ服していない、数少ない地方の一つであった。

田舎道を二人の旅の雲水が歩いてきた。二人ともかな

りの長旅を続けているらしく、衣も笠も汚れが目立つが、足取りはしっかりとしていた。

安南（ベトナム北部）に近いためか、土壌は赤土である。歩を運ぶたびに、足元から乾いた細かい赤い粒子が舞いあがり、二人の脚絆を赤く染めていた。

「お師匠さま、お疲れではありませんか？」

若い僧が、労るように声をかけた。まだ、二十歳そこそこの青年僧である。日焼けしてはいるが、根は色白であるらしい。眼が澄み、理知的な容貌をしていた。ただ、口元がちよつと異様なのは、極端な反つ歯のせいだった。いつも口を窄めているのは、本人もそれを気にしている証拠だった。

「なんの、なんの。若い時の修行が違うわ。お主にはまだまだ負けて。それにしても、陽のあるうちに中慶へ着きたいのう」

年配の僧が答える。こちらは四十五、六歳。異形の僧である。眼が三角形で、どことなく不気味な雰囲気秘めた顔立ちだった。中慶とは、いまの昆明である。

「ところで思真。この雲南の地をなんと見る？」

師の坊が、訊いた。

「地味豊か。それに温暖な気候。天下の穀倉にふさわしい地ではありますが、問題は交通です。産物をどうやっ

て江南に送るか、でございましょう」

思真は、淡々と答える。

「なるほど。わしの見るところもほぼ同じじゃ。ただ、この地方には回教徒が多い。元朝は、色目人として、彼らを才能によってどしどし登用し、重用した。その名残りじゃ。いまこの地を支配する梁王とて色目人よ」

「問題は、彼らが唯一の神アラーを信仰し、他の宗教には排他的な点でございませぬ」

「左様。燕王さまのおわず北平も、元の都、大都だっただけにいろいろの国の人間がおる。燕王さまの天下となつた場合、彼らの処遇をどうするか。わしは、御仏の道に仕える者じゃが、宗教にはこだわらぬ。燕王さまもお心の寛いお方ゆえ、才能によって彼らを用いられるのではあるまいかの」

二人が話題にしている燕王とは、洪武帝の正皇后馬氏の生んだ五人の兄弟の四番目朱棣のことである。

洪武帝には、二十六人の男子がいるが、特に馬皇后の生んだ五人を愛した。長男標を皇太子に立て、四人にはそれぞれ数千から数万の兵を授けて、重要拠点の王に封じ、もつて明帝国を外側から支える藩屏の役目を与えていた。

すなわち、次男棣は秦王として西安と名を変えたばかり

りの古都長安に、三男橐は晋王として太原に、五男橐は周王として開封にそれぞれ封じられていた。特に四男棣は、その軍事的才能を見込まれ、元の都だった大都改めて北平（現北京）に、燕王として派遣され、漠北の地に逃れた元の残存勢力に対する抑えとなっていた。棣の北平派遣は、つい一年前のことである。

察するところ、この二人の僧は、燕王に仕える筋の者であろうか。

思真は、大きく頷いて、次の質問を發した。

「お師匠さま、帝の雲南征伐は間もなくでありましような？」

「元が滅び、明朝が興つてはや十四年じゃ。いまだに帝の威に服さぬ土地があつてはなるまい。征伐軍の派遣は、もはや時間の問題じゃろうて。梁王もそのことを知つて、しきりと戦備を整えてはおるが、勝負の帰趨はもう眼に見えておるわ……」

「恐らく、ひとたまりもなく平定されることでありましような」

「問題は、燕王さまじゃ。どうやって父君の心を皇太子の標さまからご自身の方へ引き寄せるかじゃが……」

二人の足が急に停まった。

山裾を回り切つたところで、いきなり眺望が開けたの

である。左手に大きな湖が望めた。

「昆明湖ですぬ——」

思真が、湖面から吹く涼風を懐に入れながらいった。「またの名を滇池スチチという。この辺りはもう昆陽、中慶はこの昆明湖の北岸じゃ。ざっと百五十里といったところかのう」

一里は、約五百メートル。百五十里は七十五キロである。

「船着場が見えませぬが……」

思真が笠をあげて、手を翳かざした。

その時、傍の草むらから飛び出してきた五、六人の土地の子どもたちがいた。いずれも十歳前後の少年たちであつた。いずれも上半身は裸で、これから水遊びに行くところらしい。

「これこれ、中慶に渡る船着場を知らぬか？」

思真が、餓鬼大將格の柄の大きい一人に訊いた。

「あすこじゃ。山の陰になつておる。この道を真直ぐ行けばよい」

凜とした、大人びた声で大柄の少年が答えた。子どもとは思えない、逞ましい骨格を持った少年だつた。いかにも利かんぬらしい。それにしても、同年配の少年たちに比べて、群を抜く体格をしていた。陽光にさらした裸

の上半身は、筋骨ともよく発達していた。

どこか容貌が、ちがつていた。まず、色の白きである。それに、眼鼻立ちがくつきりしていた。腫の色も、濃いハシバミ色であつた。髪も赤味がかつていた。

それらのすべては、この少年の出身と深いかわりを持つていたようであつた。

「そうか、それはありがたい」

思真が歩き出そうとした時、師の坊が少年の顔を覗き込んだ。

「うむ……これは……」

彼の口から、驚きとも、呻きともつかぬ言葉が絞り出された。

「わしの顔になにかついでるのかい、旅の坊さん——」

少年は、屈託のない声を出した。

「いや、いや、これは悪かつた。珍らしい骨相をした童わんごじゃのう、お主は……」

「骨相？ それはなんじゃ——」

「大きな器量、稀に見る器量の持主じゃのう。お主、名は？」

「馬三宝トクじゃ——」

「馬三宝——父御は馬哈只殿マハジか？」

「お坊さん、父上を知つておるのか？」

三宝少年は、顔を輝やかした。

「お目にかかったことはない。じゃが、咸陽王の血を引く昆陽一の名家の当主と聞き及んでゐる」

「そうか——」

少年は、ニコリと笑った。年相応の愛くるしい笑顔だった。

「父上は、いま中慶の街へ行っていて留守じゃ。明日には帰ってこようが」

「いや、いや、ここで父御にお目にかかるつもりはない。わしらも中慶に向うでな。遊びの足を停めて悪いことをしたな……」

少年たちは、駆け足で湖の方へ去っていった。

「お師匠さま、馬哈只とは？」

思真が、訊いた。

「さっきいった色目人、多分イランかペルシャ地方の出であろう。哈只は、アラビア語でメッカ巡礼者に与えられる称号を漢字の音に当てた名じゃ。祖は、成吉思汗の西征の折、西域の草原に千騎を率いて馳せ参じた瞻思丁といわれておる。その功により、中原の地に咸陽王として封じられた。世祖フビライ汗の中統二年、宰相職の中書平章政事に任じられたが、その十三年後、雲南の長官となった。彼は六年後に死んだが、子孫は代々この地

に留まり、当主の馬哈只は、その五代目と聞く。瞻思丁の五人の子のうち、末子の馬速忽が初めて漢族風に馬姓を名乗ったが、馬は彼らの予言者マホメットの頭文字を漢字に当てたものであることは、お主も知っていいう」

師の坊は、ゆっくりとした口調で説明した。

「して、あの少年のことですが……」

「不思議な骨相をしておった。万人に一人、あるかなしの稀相じゃ」

「と、申しますと？」

「四岳峻にして、鼻小きし。眉目分明、耳白くして、面を過ぐ。齒、編貝の如し——」

——四岳峻而鼻小、眉目分明、耳白過面、齒如編貝（顔は四角ばって鼻は小づくりである。眉目は秀麗で、耳は白く、顔を過ぎるほど大きい。齒は貝のようによく揃っている）

思真は、師の坊の言葉にじっと耳を傾けていた。それから、ゆっくりと云った。

「よく衆を束ね、大事を成す——」

「よくぞ、申した。その通りじゃ。加えて、水と深いかわりがある。わしにもどういうことか、いま一つはつきりせんがのう」